

# 個性「パルプンテ」

マスターチュロス

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「お気の毒ですがあなたのあらすじ1、あらすじ2、あらすじ3は消滅してしまいました。」

テデドン!!

とある事件をきっかけに雄英高校の地下研究施設に収容された男、「乱駄無 真砲」。陰鬱な施設で生涯を終えるのかと思いきや、ある日突然、雄英高校の根津校長先生から面会希望の連絡を受けて……

※作者は文章構成能力と語彙力がパルプンテされているので、ご了承ください。

## 目次

レッツ病院フウウウウウウ!!! (1話)	1
君が……噂のパルプンテ君かい? (2話)	5
ドーモミナサン!!ランダム!!デス (3話)	10

## レッツ病院フウウウウウ!!! (1話)

パルプンテ———という呪文を皆さんは知っているだろうか。某RPGゲームにて登場するその呪文は、他の呪文と違い、唱えた人間ですらどんな効果が現れるのか分からないというギャンブルチックな呪文である。

唱える度にその効果はバラバラで、運が良ければ少しのMPで強力な魔法を放つことが出来るが、運が悪かった場合、唱えた人間に何かしらの不運が襲いかかる。幸運に凶運、軽度から重度のものまで選り取りみどりだ。

これがゲームならいい。だってゲームだから。自分が操る主人公がパルプンテでゲームオーバーしたとしても、本体は痛くも痒くも無い。むしろ可笑しくて、友達に「俺、パルプンテで死んだクソワロスwww」とニヤニヤ顔で言いふらしたいくらいだ。

じゃあ、私の個性が常時パルプンテだったら？  
死ぬまですつと、パルプンテに呪われた身体で生きていくとしたら？

!!!  
「そんなクソみてえな人生なんてやってられるかボケエエエエエ!!!」

私の名前は「乱駄無らんだむ 真砲まほう」、個性『パルプンテ』。



《雄英高校——特別地下研究施設》

「おはようございます乱駄無さん。今日の調子はどうですか」

「……………オハヨウゴザイマス。そしてオヤスミ」

「今日の天気は晴れ、降水確率は14%、人間で言うところの『お天気日和』というヤツです」

「……………どうせ、この部屋から抜け出せないんだから意味ないだろう……。ああ、眠いからもう寝るね介護A Iさん」

乱駄無は介護A Iが搭載された、喋るモニターに背を向けてゴロリと寝つ転がった。毎日毎日飽きもせず、決まった時間に起こしてくるヤツに何度か殺意を覚えかけたが、それはもう昔の話。今の私には「スルースキル」という、心に余裕のあるものだけが使いこなすことが出来る技術を身につけている。余程のことが無い限り私はアイツの話に耳を傾けることは一切ないだろう。

「そう言えば、校長が乱駄無さんと面会したいという連絡が今朝届きました。読みますか?」

「ブハツつ!? ……え、校長?」

まさにフラグ回収。唐突の出来事に乱駄無は取り乱してしまった。

「校長……………って誰よ」

素朴な疑問にモニターは応えた。

「この施設の真上に位置している雄英高校の校長、根津校長先生です」

根津校長……………会ったことがあるような気が一瞬したが、一瞬だけだったので全く思い出せなかった。

「……………知らね。けどそんな偉い人が私に一体何の用なんだ?」

「知りたければ、早く着替えて面会の準備を始めてください。面会の時間は a. m 10:00 です」

サツとデジタル時計に目を向けると、現在の時間は午前7時23分。面会まで後、2時間37分。時間は存分にある。

「まだ3時間もあるじゃん。おやすみ」

意外と余裕があることが分かったので、私は布団を被り、モニター

に背中を向けて再び夢の世界へと旅立つ準備を整え始める。スルースキルも復活したし、もう隣でモニターが何を吠えようと起きるつもりは無い。寝る。

しかし十数年も乱駄無の面倒を見続けた介護AIにとって、このような反抗期の彼にやる気を出させることなど朝飯前である。

「いつももの注射、打っちゃいますよ?」

ピクつと肩を震わせる乱駄無。嫌いなワードが頭の中で屈伸運動を始めた後、私の脳みそを好き放題にロクククライミングしやがった。注射……だと?

注射……、いつも決まった時間に打たれるあの注射。自分の個性を抑えるためとはいえ、あの薬は異常に効きすぎるせいで、刺されてから10秒ほど立つと全身を針で滅多刺しにされるような感覚が走って物凄く痛い。

刺される瞬間を想起すると、顔から血の気が引いていく。寝起きでまだ覚醒しきっていないというのに、めまいと頭痛が止まない。

「お願いします……注射だけは、注射だけは止めてください!!」

割と本気で訴えた。

「ならば起きて準備を始めてください」

「……………はい」

「校長と会う以上、朝注射は免れませんかね」

「なんか言った?」

「いいえ、何でもございません」

不思議な挙動をするモニターに疑問を感じながら、私は用意された外出用の着替えを黙々と着始めた。外出に面会、今まで頑なに許されなかった行動が今日になって許された。会うのは面識の欠けらも無い校長だけど、施設の人以外の人と会える機会なんて滅多に無いことだ。楽しみで仕方がない。

「よし、着替え終わった。じゃ、行ってきまーす」

新たな出会いに胸を膨らませ、私は扉の取手を握り、勢い良く開こうとした。

ビ——ッ!!

「被検体SSR—K459T、3度目の脱走の意思を確認。5秒後に催眠ガスを噴射します。人体に悪影響は有りません。」

「……………、やっべ10時からだっzzzzzzzzzzzzzzzzzzzz」

冒険の第一歩を踏み外すどころかスタート地点にすら立たせて貰えず、結局私は心地よい催眠ガスで寝てしまった。

君が……噂のバルプンテ君かい？（2話）

5月ンフンフ日、 a. m 10:03

「やあ。初めまして乱癡気くん。私がこの学校の校長先生、根津なのサ!!」

「乱駄無です」

初っ端から名前を間違えられた男、乱駄無 真砲は、催眠ガスによつて眠らされてしまったがモニターのやかましい目覚ましのおかげで無事起床。したのはいいが、どうやら寝てる間にこっそり注射を打つたらしく、私の頭の中は常に「帰つたらモニターぶつ壊す」の文字でいっぱいだ。痛みが全然引かない。

「失敬、トランザムくん。「乱駄無です」……そんなことはどうでもいいのサ！ 私は君にとつてとてもビッグなニュースを伝えたいだけなのサ！」

にこやかな笑顔で話しかけてくるこの校長、あまりにも胡散臭い……というか動物臭いヤツで信用ならん。というかコレ人？ ネズミが二足歩行して言葉喋つてるだけなのでは？ いや凄いいけど、え何なのコイツ。

「ビッグなニュースとは？」

普通に聞いてみた。

「それはもちろん！」

「君を雄英高校に入学させようかなつて話サ」

「へえー」

入学ねえ……………。

机に置いてあつたコーヒーカップを手に取り、一口啜つた後、もう



一度頭の中で校長のセリフをリピート再生する。

入学させようかな……

入学させよう……

入学……

乳学……

乳……。

「はブウツツツはアアア!!?」

吹き出すコーヒー、それを全身で受け止める根津校長、驚きを隠せない乱駄無、3つの事象が1つの空間内で同時多発し、それはそれは見事なファンタジーであった。

「は、え? 入学!」

「そう、君を入学させようかなと朝思いついたんだけど、今のでなんかやる気失くしたのサ。君にもう明日は来ない」

「ちよつと待つてください!?! 何で入学!?! 今までずっと収容してたくせに突然の解放!?! ひゃっほーいッ! ……じゃなくて、理由を、理由を教えてください社長!!」

「校長なのサ」

校長は茶色に染った自身の体毛をタオルで熱心に拭き取ろうとするも、なかなか上手くいかない。風呂に入りたい欲求が胸の奥でざわめくが、自分がこの人間を呼んだ以上最後まで対応するのが大人である。

タオルを適当にぶん投げると、校長は乱駄無の目を見据え、その理由を口にした。

「ヤンバルくん、君はどうやら記憶を失っているらしいね。医療カルテにもそう記述されていたよ」

「……………はい。記憶失ったって感覚すら失ってるんですけどね……………」

複雑な感情が乱駄無の心を支配する。昔、自分が起こしたという事

件、後から聞かされたため実感が全く湧かなかった。気付いた時には病院の中、親は行方不明、誰もいない部屋で待つ日々、毎日打たれる個性抑制剤、つまらない人生だった。

「僕はね、君を救ってあげたいのサ。本来なら君は、幼少期から青年期にかけてたくさんの人や物に触れて、よく学びよく遊び、ときに泣きときに笑う、皆人などと同じ豊かな人生を歩むはずだった」

「記憶に無い出来事で病院に収容され、そのまま何も満たされないまま生涯を終える、そんなの間違っていると思うのサ」

「この雄英高校なら、多くの生徒と出会える。優秀な先生が困っている生徒を教え導き、最後まで生徒の道を支えてくれる。この学校なら、君が今まで満たされなかつた何かを満たされる。どうだい？ この雄英高校に特別入学して、君の人生の扉を大きく開いてみないかい？」

つぶらな瞳で真剣に語る校長の熱意に押され、乱駄無はゴクリと唾を飲み干す。雄英高校、それは日本で最高峰のヒーロー高校（wiki調べ）、その校長先生から私は直々に特別入学を勧められている。こんなチャンス、滅多にない。あの施設に戻ったところで何かが変わる事など、この先一生も無いだろう。断る理由なんて、無い。

「……ヤッ」

「雄英高校に、入学させて下さい」

自分でも驚くほどの大きな声が出た。決意表明とも受け取れるその発言は根津の心に響き、ひたむきな彼の目は、幼い子供が夢を追いかける時と同じ目をしている。

彼の意志を受け取った根津は、小さく微笑んだ。

「……………歓迎するのサ、ランサムウエアくん。「乱駄無です」黙れ。ここが君の、ヒーローアカデミアさ!!」

だまつ……………、えッ……………

んんツ、こうして私は校長の激励を受けて、ついに雄英高校の特別入学を果たしたのであった。

く 「完」 く

「いやまだ終わらないし、ただで入学も出来ないのサ」

「嘘だツ!!」

「残念ながら雄英高校は国内最高峰。それに見合う実力が無ければ入ることは許されないのサ」

至極ごもつともな正論、反論の余地無し。いくら自分の人生が常人より過酷だったとはいえ、国内最高峰のヒーロー学校である雄英高校をタダで合格して貰えるほど世の中は甘くない。チャンスは貰うものではない、自らの手で掴み取る物である。高校の筆記試験レベルなら施設で既に習得済み、面接は苦手だがまあ気合いで乗り越える。よし、ドンと来い。

「……………分かりました。何来ても答えます」

「よろしい、では一つ目……………」

「君のこゝs」

「越後製菓!!」

ピンポンピンポン

あまりにも早い解答。校長が望んだ答えを迅速かつ短く丁寧に伝えるその技術は、かつて古代文明を築き上げたマハールフンハツハ族

に伝わる失われし技術。まさかこんなところでお目にかかれるとは予測できなかった。

施設育ちのアマチュア小僧だと舐めていたが、評価を変えざるをえない。

(この男、出来る……………ツツ!!)

そう確信した根津は、キリツとした表情で彼に宣告した。

「……………合格だよランクルスくん。「乱駄無です」シヤラップ。君はもう立派な雄英生徒だ……………誇りを持つといい」

「……………ありがとうございます」

見事、校長の意図を汲み取り、雄英高校合格の切符を手にした乱駄無。……………厳しい戦いだったが、自分だけが唯一持つ「愛と正義」の心が校長の難問を打ち破ったのだ。やったね☆  
私はやつと、前に一步進むことが出来た。

「……………(こ)ならきつと、欠けた何かを取り戻せる」

手を胸に当て、心の穴をさすように手を動かす。まだ見ぬ仲間たちとの出会いが、自分をより強く成長させてくれると願って……………

「待っていないな、雄英高校。私が行くぞ!!」

THE END

## ドーモミナサンⅡランダムⅡデス（3話）

雄英高校初登校前日の夜、乱駄無は明日が来るのを今か今かと待ちわびながら、布団の中でクネクネともがいていた。

遠足前の小学生さながらである。

「……なあ、学校で皆と仲良くなるためにはどうしたらいいと思う？」

乱駄無は背中を向けつつ、看護AIに悩みを打ち明ける。

この16年間、人との関わりが極端に少なかった彼のコミュニケーション能力は当然皆無であり、自分と同年代の人間にどう接すればいいのか分かるはずがなかった。

知らないというだけで不安が込み上がってくる。

人の心とはこれほど面倒くさいものなのかと、乱駄無は他人事のように捉えながら、AIの応答を静かに待った。

「検索します。……興味深い記述を確認。」

「教えてくれモニター」

「解析。……『全国陰キャ童貞ボツチ道連れ同盟.com』の記述によると、「派手に行つてネタキャラに昇華すればポジションは獲得出来る。全裸だ。全裸で行け○」、「開幕一発ギャグしろ。もちろん下ネタな○」だそうです。」

「……ねえ、他にマシなの無いの？」

「検索。……発見、解析します。……『WAO(World Alone Opinion)』、通称『世界ボツチ機関』の記述によると、「登校を拒否せよ。我々が帰るべき場所は聖域<sup>ゲームセンター</sup>及び守護領域<sup>自宅</sup>であつて地獄門<sup>学</sup>デスゲート<sup>校</sup>ではない○」だそうです」

「……私なんかより、病院で入院した方がマシな人間がたツツくさんいることがよく分かったわ。もう寝る」

クソの役にも立たないアホAIと大量のボツチが蔓延る世間に呆れながら、乱駄無は静かに布団を被った。

結局、明日どうやって自己紹介すればいいのか、分からないままになつてしまった。

別に失敗してボツチになっただとしても、生まれた時からボツチな私にとつてはさほど問題無い……けど、せつかく通うのだからその、『友達』……とか欲しくなるのは不自然なのだろうか。

よく分からない、けど、このさつきから喧しく騒いでいるこのドキドキした気持ちは、悪くないかもしれない。

「……男がドキドキしても誰も得しないですよ？」

「うるせえよ!! いいだろバカヤロー!!」

嫌味つたらしく言葉を吐き捨てるAIに、乱駄無はキレ気味に文句を言った。

いつも思うが、このAIはいったい何なんだろうか、はつきり言つてコイツ全然AIらしくない。

AIってのはもつとお淑やかで、主人の命令を淡々と実行する、機械的で自動的で、私情を挟むことなど絶対無いような、そんなものだと前はイメージしていた。

けどコイツは何？ 私情どころか皮肉や嫌がらせをバリバリ混ぜてくるし？ 主人の要望を叶えるどころかグチャグチャにぶち壊して嘲笑するような、どこか上から目線な態度、到底許されるものではない。

あまりにムカついた結果、二度、モニターを完膚無きまでに叩き壊した事があつたが、翌日になると新しいモニターが当然のごとく支給されたし、クソAIも引き継ぎ完了されていた。

つまり、キレて壊しても無駄なのだ。

無駄なので私はこの怒りを、クソAIを作った製作者に一発拳を叩き込むまで奥底に静かに沈めることにする。

「……乱駄無さん、私が自己紹介のコツを教えて差し上げましょうか？」

反省したのか、はたまた追い打ちをかけに来たのか、ポンコツAIは諭すように話しかけた。

「……どうせ、ろくでもないんだろ」

期待せず私は布団の中で蹲うずくまった。

「……自己紹介のコツは、相手に自分の持つ個性をアピールすること

です」

「……」

「個性……というのは、単に自身の能力だけでなく、好きな食べ物や好きな色、趣味や特技といったものです。そういった自身の情報を相手に公開することで共感や共有、もとい『友達作り』に発展するのです」

「……なるほど」

「参考になりましたか？」

クソAIの癖にひどく丁寧に説明されて呆気を取られたが、確かに参考にはなった。

「参考になった……けど」

「その、ここの食事って3食全部カロリーメイトとおーいお茶だし、施設内の色って殆ど白と黒だけだし、そもそもこの部屋何も無いから趣味もへったくれも無くない？」

「……」

押し黙った二人の間に生まれた悲しき静寂。

予算が少ないのか、それとも予算を回す気が無いのか不明だが、とにかくこの施設は娯楽要素が少なすぎる。

食事はカロリーメイト、景色はモノクロでせいぜいあるのは被験者の運動能力を計るために作られた運動場くらい。

予算が足りないのか、それとも予算を回す気がないのかは定かではないが、とりあえずここの施設はクソだってことだ。

「……寝るか」

明日のことは明日考えればいい、そう思った乱駄無は布団の中でスヤスヤと眠り始めた。



翌日の午前8時30分。

《雄英高校 1年A組》

何気ない日常、最下位のスコアを出した生徒は退学する地獄の『個性把握テスト』（退学はフェイクだったが）を乗り越えた彼らは、お互いの個性や趣味について楽しげに語り合っていた。

まだ知り合ってから数日も経っていないが、その仲の良さはまるで戦争で生き残った戦友同士のごとく打ち解け合い、またある程度グループが形成されている。

ガラガラッ

「…………おはよう」

「「おはようございます」」

担任教師である相澤先生が目元に隈を引つさげ、のそのそと登場。相澤先生の存在を感知した雄英生徒は即刻会話を中止し、喋る石像と化す。

「…………とりあえず飯田、号令」

「キリいいいっつツ!! れええええええツツ!! 着席ツツツ!!」

ガタガタガタッ

気合いの入った号令が高らかに鳴り響き、飯田は口角が釣り上がるほど興奮していたが誰もツツコミはしない。

今日は何を言い渡されるのか、また無茶苦茶なこと言われるのではないかと警戒する生徒達だが、その予想は大きく裏切られることとなる。

「えー今日はね、転校生を紹介したいと思います」

「「クソ学校ぼいの来ツツツ……………」」

「つて……………」

「「ええええええツツ!!」」

突然の転校生来校に驚愕するA組。

そもそも難関高校に転校などという話は聞いたことがない。

余程頭がいいのか、それともかなりの身体能力の持ち主なのか、いや両方を兼ね備えたとしてもやはりおかしい。



「まだ5月なのに転校って……………あるの？」

「静かに。…………ま、お前達が驚く気持ちは分かるが、この転校生は例外中の例外。滅多にあるもんじやないから……………まあ仲良くしてやってくれ」

左手で顔を隠しつつ溜息を吐く相澤先生を見て、これは経歴がかなりヤバイアレな奴だと察する生徒達。

だが異例の転校生などというビッグニュースを聞けば、誰であろうと盛り上がるし、考察したくなるものである。

「ねえねえ、誰が来ると思う？」

「イケメンだったらいいよねえ」

「イケメンなら轟がいるじゃん」

「イケメンは何人いてもいいの！」

ピンク色の肌をした女子と、透明人間の女の子、耳の長く胸のない少女が愉快地に会話を繰り広げる。

「可愛い女の子だったらいいなあー！」

「熱い男は大歓迎するぜ!!」

「ビッチな女アアアアアア!!」ベシッ

エレクトロニックな青年と全身カチカチの青年が互いに理想の転校生を思い浮かべ、頭から黄色ブドウ球菌が生えている少年は妄想の世界へとダイブしかけたが、同じクラスのカエルのような女の子に舌で叩かれ妨害される。

「はい静かに。駄べるならファミマのトイレの中だけにしてね。

……………じゃ転校生、入ってきて」

もうドアの向こうにいるらしく、相澤先生は眠たげに手招きをしている。

イケメンか、はたまた可愛い女の子か、それとも熱血漢、ビッチ、天才、脳筋、陽キャ、陰キャ、キチガイ……………誰なのか全く予想出来ない、だからこそドキドキが止まらない。

ガラガラツと扉が開く。

それをじつと見つめる1年A組の生徒。

緊張の一瞬、唾を一口飲み干した直後、現れた生徒の正体は

……………ッ!!

「あーちくしょう、全部あのクソAIのせいだ。きつとそうだ。帰つたらぶつ壊す、ギタギタにぶつ壊す、NHKもろともぶつ壊す」

(（なんかヤベエ奴来た）)

死んだ魚のような目をした、白髪で小柄でひ弱そうな少年が、ブツブツと恨み言を吐きながら入ってきた。

「あつ……………」

少年は何かを察すると、ピキピキツという音が聞こえてきそうなくらいに体の動きが固まり、錆び付いた自転車の鍵穴のごとく、ぎこちなく首を回しあたりを見回した。

(ヤベエ、絶対変な奴だつて思われてる)

ついさつきまで自己紹介の仕方について死ぬほど考えていたが、特に何も思いつかなかつたため取り敢えずクソAIのせいにして緊張を紛らわそうとしていたのだが、裏目に出てしまったようだ。

思考回路がどんどん閉塞していく。

なにか手を打たないと第一印象がヤベエ奴だと思われてしまう。

まるで失望したかのような目線でこちらを見てくるA組の生徒達、ここからどう挽回すればいいのか……………

「じゃ、自己紹介よろしく。手短かにね」

静かに告げられる相澤先生の声。

ここだ、挽回するならここしかない。

そう感じとつた私は朝の家に何度も練習した自己紹介の内容を再びインストールし、言葉として吐き出す。

(自己紹介のコツは確か……………)

” 派手に行け。全裸だ。登校拒否。自分の個性をアピールすると。派手に行け。全裸だ。登校拒……………”

昨日の会話が走馬灯のごとく蘇る。

ただしゴチャゴチャしていてどれが正解なのか区別がつかない。

” 乱駄無、強気で行け。お前だけの力を示すんだ”

どこか聞き覚えのあるセリフが聞こえてきた。

誰だったか思い出せない、けど、その言葉は私に一欠片の勇気をくれた。

「……私の名前は乱駄無<sup>らんだむ</sup> 真砲<sup>まほう</sup>。好きな食べ物はカロリーメイトチョコレート味、嫌いな食べ物はカロリーメイトチーズ味だ。よろしく」

自分とは思えないくらいのオラついた口調で、私はスラスラと自己紹介した。

「個性は………」

そう言いかけた直後、喉元で一旦ブレーキがかかる。

自分の個性、他人に言ってもいいものだろうか。

この個性のせいで私は施設に隔離され、忌み嫌われ、今日この日まで過ごしてきた。

嫌われないだろうか。

避けられないだろうか。

心配な部分は多々ある。

けど、まあ、いつか。

「私の個性は……『パルプンテ』だ」テレテレツ！

パァン!!

「きやつ!!」

「うおつ!!」

パルプンテ、……そう告げた直後に奇妙な電子音が流れると突如空気が爆ぜた。

しまった、私の個性は使う意思があるとなかろうとその言葉を口にするだけで発生してしまう厄介な個性だということ忘れていた。いやしかし、元々何かしらのパフォーマンスをする予定ではあった以上、この機会は転校生の私としてとても美味しい場面だ。

仮にとんでもない失敗をしたとしても、それを利用してギャグキャラのポジションを獲得すれば……

「ん?」

やけに涼しい風が私の肌を撫でる。

そして妙に股間の通気性が快調になった気がしてならない。

私はサツと目線を下に向けた。

私のモバイルアーマーがキャストオフし、そそり立つビートルが現世にて卍解した。

飛び出したダブルニップルも、クラスメイトに銃口を向けている。

「なんてモノ出してやがる……相棒<sup>息子</sup>」

「いやお前だよ」

すかさずツツコミを入れる上鳴。

英雄生徒が真顔で見守る中、彼の目は既に灰色に染まり、吐血を繰り返しながら自身のビートルに向けて語りかけていた。

「げぼはアツ!! ……へへっ、私は永遠の病的患者、オル……ゲボほおっ! ……こんくれえなんてこたあねえ」

「……今オルガって言いかけたぞ」

「何で鉄血のオルフェンズなんだよ……」

血を撒き散らしながら、1歩、また1歩と窓に向かって歩いていく。景色が霞んできた、体もドンドン冷えてきている、もう私の生命はそう長くは持たないだろう。

だが最後くらい、あの青空の元で、みんなに見守られながら、死にてもんだ。

「まっ、窓が近い……! 私はここから、大空にフライアウェイするんだ!!」

「待て、早まるな!!」

大勢の人が私を止めるべく、ドタバタと席を外した。

たった一人の人間のためにここまで尽くすなんて、このクラスは優しい人でいっぱいだ。

「とおうツツ!!」

だからこそ、生き恥をさらした私は死ななければならぬ。

パリン!!

全身に降りかかるガラスの破片、窓を割って外に出た私が向かう先は、目が霞むほど遠くに存在する奈落の底。

およそ20mほどの高さから落下した私の体は自由落下運動を始め、徐々に落下速度が加速していく。

この高さから落ちれば死は免れないだろう、だが私の心には動揺や焦りといったものはなく、むしろ清々しいしよねんのたますいーをビンビンに感じていた。

クラスみんな、出会ってほんの少ししか時間が経ってないけど、先に逝っちまってゴメン。

自己紹介が事故紹介になっちゃったけど、許してくれピーマン。  
最後に一言、一言だけ言わせてもらおうと……

「これからも、個性『パルプンテ』をよろしくねっ！」テレテレッ！  
「アイツ、露骨に宣伝しやがったツツ!!」

彼の体が地面に触れた瞬間、まるで弾力性に富んだゴムボールのごとく地面を跳ねた。

おそらく個性『パルプンテ』によって、一時的に彼の体がゴム人間に変わってしまったようだ。

今ならゴムゴムのピストルが撃てるかとも思いつつ、乱駄無はそのまま我が家へと帰っていった。

「何だったんだ………アイツ」

取り残された1年A組のクラスメイトは帰っていく彼が視界から消えゆくまで、彼の背中を呆然と眺めているのであった。